
魂の檻

レシピエント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂の檻

【Nコード】

N0920Z

【作者名】

レシピエント

【あらすじ】

これといった特徴のない僕でも、彼女ができ、なんでもない日常を送る。

毎日に大きな変化はない。

それでも幸せだった。

僕の人生は1人の人間に引き裂かれ、僕の心は、魂は苦しんだ。

…今、ここに、なぜ、生きている？

ストーリーが書いていて、中々進まず、読んでいる方は余計に遅く感じるかもしれません。
それでも読んでくださる方がいれば、うれしいです。

日常の朝

おれの築いてきた24年間はどこへいった。

彼女はとうなった。

なぜ？

…どうして――――

「起きなよー」

彼女のこえで目が覚める。

何か嫌な声を聞いたようなきがしたけど…

思い出せない。

僕は篠田 慎^{まこと}24だ。

いましてがた僕を起こしたのは島田 咲。大学からの同級生だ。

「まあ、休日だからって寝てないで遊ばないと、すぐ月曜日になっちゃうよあ?」不満げにいう彼女。

「はあー、もうちょっと寝ようよ。ね?」抵抗する僕。

ばさっ…

「あー!」

…やられた。

ガードが甘かった。

「掛け布団引つpegすなんて…どこの親がよくやるアレじゃないかあ…」

不満を漏らすも全く動じない彼女。
しょうがない。起きて付き合うか。。

「わかったわかった。こーさん」

降参のポーズを見せて起き上がる。

「へっへえー。今日はショッピング行ってランチ食べるんでしょ!」

アレ？そんなこといつてたっけなあ…

「忘れた？忘れたふりしてもいくのは決定だかね？…さっ、準備！！」

「ええ、もう行くの？朝ごはんはないの？？」

「え？もう食べたよ」

「へ？誰が」

「あたしが！」

「……………僕のは？」

「ランチに合併されちゃった！」

ニヤッと彼女に口が広がる。

この顔は嫌いじゃない。

ああ、しばらく腹ペコでショッピングさせるつもりだ…

そんなことを考えながら準備をするのだった。

出会いと提案

彼女と知り合ったのは大学の…

はずかしながら…コンパだ。9月ごろだっただろうか。

まあ、彼女はともかく、僕は楽しいキャンパスライフに花を…とかアホなことをかんがえてたので、友達が開いてくれるコンパの常連だった。

特に目立つ訳でも、話がうまいわけでもなかったし、毎回結果は惨敗だったのは言うまでもないが、見た目は普通だと思ってたし、服装にもある程度気を配っていた。

言ってしまえば、良くも悪くも平凡だったのだろう。今考えてみれば、良くもまあそんな成りでコンパなんか行けたなあ…と思わなくもない。

まっ、彼女欲しさに焦ってたんだ。

そんな中、ある日のコンパで会ったのが彼女。

どういきさつで彼女がそのコンパにいたのかは知らないが、その日のコンパで僕からみれば一番いい子だった。

言うまでもなく徹底的にアプローチをかけたけど、僕には全く関心がなさそうだった。会話が続かなかった。

それでも諦めきれなかった僕は、帰りの方向が同じだと嘘をついて二人だけになるように頑張った。

きつと彼女にも見え見えの嘘にしか見えなかったことだろう。

そんな彼女を相手に僕の話術で話が続くわけもなく、やがて二人ともだまりこんでしまった。

僕のスニーカーの擦れる音と彼女のヒールがアスファルトを叩く音だけが妙に響く。

今日もダメだ…

もう別れて帰るかな…

「……くていいのに」

口を開いた…

「えっ？　なんていった？」

声がかすれて聞こえなかった。

「飾らなくていいのに…っていったの。」

「どういう…こと？」

意味がわからなかった。

「そのまんまじゃない。コンパでだけかとおもったら、今だって…なに一つ自分を出さない。口を開けば当たり障りのないこと。そんなんであたしに近づこうとなんてしないで。」

「…そんなこと……」

…ある

言葉が続かない。

一気にまくし立てられた。彼女の口は今の僕を正確に表していた。自分でもそこまでひどいとはおもっていなかった。思い当たる節があるから…余計に反論できない。

「ごめんね」

唐突に謝る彼女。

まだなにもいえなかった。

それでもなんとか振り絞る

「いや…その…う、うん」

ほとんど言葉になっていない。

「でもね、たとえコンパであつても、近づこうとしてるくせに、あなたを見せてくれない態度に不満でね…」

「……ごめん」

再び黙り込んでしまった。

しばらくして、もう一度彼女が口を開いた。

「じゃあ、もう一回だけチャンスあげる。あたしが納得したら、満足したら、付き合っただげる。」
変な提案だった。

「…どういうこと？」

意味がわからない。

いや、言ってる意味はわかる。

でも…いい条件ではある。だからなおさら分らない。

「だから、今度会うときに、君が本当の自分を出して。君が本当の自分を出してるってあたしが判断できたら、合格。」

「…合格…？」

「そつ、合格。やる？やんない？好きにしていよいよ」

からかわれてんのかな…？

だいたいどうやって…

本当の自分を、って…

でも、もしかしたら…付き合えるかもしれないし。

「よし。やらしてください。」

「やるのね！じゃあ、日程はメールするから、メアド教えて？」

おお！メアドゲット！！

なんて思ってたなら、顔に出たのかもしれない。

「あたしがいいっていうまで、確認のメール以外受け付けないから。」

…釘を刺された。

「えつ、ああ、わかった」

ばれたか。

「じゃあ、ここまででいいよ。君も帰んなよ。どうせこっちの方面じゃないでしょ？」

またばれてた。

「あー。うん。知ってた？ごめん。」

そう言ってその日は別れた。

試験：デート

コンパの次の日もそのまた次の日も、彼女からのメールはこなかった。あまりにメールがなくて、やっぱり騙されたのかと思い始めていた。

そうして2週間後。
メールがきた。

2011/9/27 (Tue) 18:24

FW：日程

今度の日曜日なら暇だけど…
その日は空いてる？
お昼過ぎからならだいじょうぶだよ。

島田 咲

嬉しかった。
もちろん返事はOKだ。
素早くメールに返信する。

送ってしまったから思い出した。

そうだ。ただのデートじゃないんだった。

これで失敗したら二度とチャンスが無いんだった。。

なにをしたらいいかな。

どこに行けばいいだろうか。

なにを着れば…

待てよ。

彼女は「自分を、ありのままを」て言ってたよな。それだったらむしろ、普通の日と変わらない方がいいのか？

普通は…

どんなんだっけ

いつも通り…いつも通り…

あーわからん。

だめだ

考えれば考えるほど分からなくなる。

ひたすら考えた。

――

そうだ！

今きてる服は少なくとも意識してない。

これだ！！！！

場所はいってから決めた方が自然かな？

じゃあ、考えなくてもいいんだな…

そう考えて急に楽になった。

「とりあえずそれまでは大学のレポートでもやりますか」

悩むのをやめた。

一応待ち合わせの駅とお昼頃の待ち合わせのメールだけいれておいた。

――

「10月2日、日曜日のお昼のニュースの時間です」

アナウンサーが僕に向かって原稿を読み上げる

僕はというと、日曜の昼だというのに、まだ寝ぼけてる。

起きてテレビを眺めながらインスタントコーヒーを飲む僕。
ひたすらしゃべるテレビ。

「…今日未明、…県…市のマンションの一室で一人暮らしの女性が遺体で発見されました。鍵は壊されておらず、交友関係のあるものの犯行とも思われましたが、最近頻発している一人暮らしの女性を狙った事件との関係性も視野にいれて操作を進めるとのことです。さて、続いては今日の…」

物騒だな。そんなことを考えながらケータイをチラリとみると、着信を知らせるランプが点滅している。

メールを開いてびっくりした。

いずれも彼女…島田 咲からきている。

内容を見て変な汗が出てきた。

「やばいやばい。今日だった今日だった。。。」
焦ってなにからやっていいのか分からない。

「き、着替えなきゃ」

その辺にあつた服をひつつかんで猛ダツシュで着替え、おしゃれもそこそこに飛び出した。

駅についてみると、待ち合わせの時間50分ほどオーバー。
もういないかな…とおもったら…いた。

大慌てで近寄って

「ごめんなさい」

と、手を合わせて謝った。

…無言

これはまずいぞ…

一回きりのチャンスだったのに。
顔を上げるのが怖かった。

――

クスツと笑う音をきいた気がした。

あれ？

そんなはずはないと思いながら、顔を上げる。

…笑ってた。

「は？」

意味が分からなくなって思わずそう言ってしまった。

彼女が口を開く

「ちよっと、いくら自分を出せて言っただって、そんなアホな一面

わざわざ見せなくたっていいのに。」

…意味が分からない。

「あ、アホなつて…たまたまだよ。今日は…その…寝てた。」
言い訳が普通すぎる。

「ほらあ。それに服だつてシワツシワじゃんか。髪もくしゃくしゃだし。そこまでリアルにヤンなくてもいいのにさー」

「演出じゃないよ！！今日は慌ててきたから…」
弁解する僕。

「そこがアホな部分なんだつて！」

逃げられないな…

「アホ…か」

一応、デートがダメになったわけじゃ無いみたいだ。
良しとするか。

どうも今の僕の状態が素を出した結果だと思われてるらしいのは不本意ではあるけど…

「で？今日は名にするか決めてるの…？」

変なことを聞くなあ…

「ありのままって言ってたから決めてないよ…？」

僕は悩んだ末の答えを自信を持って答える。

これでもう彼女は僕にメロメロのはずだ。

「はあ？なにいつてんの？」

信じられない様子だ。

「え？でも、ありのままってそういうことじゃ無いの？…ねえ？」

「ありのままって…それじゃあただのずばらかマヌケよ！！」

そう言い放つ彼女。

ああ、なんか心がいたいぞ。

「ずばらにマヌケって…」

「まあいいわ。とりあえず昼ご飯でも食べましょ。」

飽きれつつも笑ってくれる彼女。

自分が行き先は決めることにしたようだった。

彼女とのはなしは話せばキリがない。

結論から言うと、その日の夕方、僕のどこか抜けていたところを僕の「ホント」として認められ、同時に僕のことにも付き合う相手として認めてくれた。

最初は外側だけの「好き」がたった一日だけど中身もひっくり返るための「好き」に変わっていった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920z/>

魂の檻

2011年12月3日19時52分発行